

女院御幸

皇太后等院號ヲ奉リシ後ハ女院ト稱シ之ヲ尊ブコト、太上天皇ニ準ズルヲ以テ、其他所ニ臨御スルヲ御幸ト稱ス、其儀式詳ナラズト雖モ、長元二年、上東門院、里第二御幸ノ時、檳榔毛車ニ御シ、公卿前後ニ供奉セシヲ見レバ、儀衛ノ盛ナルコト、其一斑ヲ知ル可シ、院號ノ後、始テ他ニ行キ、又歳首他ニ行クヲ、御幸始ト稱ス、遊覽方違等モ、上皇御幸ニ準ジテ知ル可シ、神佛御幸ヲ省キシ事モ、前ニ同ジ、

院號後御幸始

〔兵範記〕嘉應元年六月五日庚寅、建春門院○後白河院、號之後、初可有入内御幸、

〔玉海〕建久二年七月十三日己未、此夕宜陽門院○皇女觀子、初度御幸、自六條殿○日來與法皇、自院號之日、所御坐也、渡正親町亭給也、公卿右大將以下廿人云々、唐車出車五兩○毛車女房二人乘之云々

〔仲資王記〕承元元年六月廿二日丙寅、修明門院○重御幸始也、七條院御所、三條鳥丸殿也、自高陽院

西面、自大炊御門大宮至三條、殆及子刻歟、

〔女院小傳〕北白河院○藤原、後高倉妃○中貞應元七十一院號、御出家同廿一殿上始御幸始、

〔増鏡○内野の雪〕寶治も三年になりぬ、春たち歸るあしたの空の光は、思ひなしさへいみじきを、○中略四日は、○中大宮院、○後嵯峨内へ、御幸はじめ、これもかむたちめ、殿上人有つるかぎり殘なし、

年始御幸

あじろびさしにたてまつる、皇后宮○土御門の御かたのひがしむきへ御車よせて、みや御たいめむいとめでたし、○深草はまだいといはけなき御ほどにて、かくいつくしき萬乗のあるじにそなはり給へる御ありさまを、女院もいとやんごとなく、かたじけなしと見たてまつり給、

〔宣順卿記〕慶安四年三月八日、今朝本院○水尾、女院○東福門、御幸長谷、十日、本院女院還幸○長谷

○按ズルニ、續史愚抄慶安四年三月八日乙酉、本院、女院、幸長谷殿○在岩倉、女院御領○爲、トアルニ

訪子女

訪子女

○按ズルニ、續史愚抄慶安四年三月八日乙酉、本院、女院、幸長谷殿○在岩倉、女院御領○爲、トアルニ